

第106回 記者懇談会実施概要

- 1 日時 平成27年10月21日(水) 15:00～17:00
- 2 場所 関西大学千里山キャンパス 100周年記念会館 第2会議室
- 3 内容

(1) 研究発表・質疑応答(15:00～16:00)

- ・赤枝 尚樹 社会学部助教

発表テーマ「日本におけるコミュニティ問題の検討

ーコミュニティ喪失論・存続論・変容論の対比からー」

- ・小林 晃 環境都市工学部教授

発表テーマ「20万個あるため池が陸の津波を起こす可能性」

(2) 学内状況説明・情報交換(16:00～17:00)

- ① 名誉博士称号贈呈および学長表彰について 資料1
- ② 「関大防災Day 2015～広がれ!みんなの安全・安心～」の開催について 資料2
- ③ ナレッジキャピタル「超」学校シリーズの開校について 資料3
- ④ 男山地域まちづくり連携協定に基づく第2回年次報告会の開催について 資料4
- ⑤ 平成27年度芸術文化魅力育成プロジェクトの開催について 資料5
- ⑥ 関西大学研究・技術シーズ集2015-2016の発行について 資料6
- ⑦ 平成26年度学生生活実態調査報告書の発行について 資料7
- ⑧ ビジネスプラン・コンペティション「KUBIC 2015」開催報告について 資料8
- ⑨ 体育会馬術部第65回全日本学生賞典障害飛越競技大会取材のご案内について 資料9
- ⑩ 関大生の活躍について 資料10

4 大学側出席者

楠見晴重学長、西村枝美学長補佐、

赤枝尚樹社会学部助教、小林晃環境都市工学部教授、

松並久典総合企画室長、中川雄弘広報課長、宮武明生学長課長 他

5 参考資料

- (1) 関西大学通信 第444号
- (2) 関西大学アジア文化研究センター国際シンポジウム チラシ
- (3) 関西大学高槻ミュージズキャンパス公開講座 チラシ
- (4) 第35回「地方の時代」映像祭2015 チラシ
- (5) 行事予定表(10月～12月)

以上

【次回(第107回)記者懇談会開催予定】

日時:平成28年1月29日(金) 15:00～17:00

場所:千里山キャンパス 関西大学会館 グランドフロア常任理事会議室

日本におけるコミュニティ問題の検討

—コミュニティ喪失論・存続論・変容論の対比から—

社会学部助教 赤枝尚樹

【概要】

農村と比較して、都市は人間関係が希薄であり、人々のつながりを失わせる場所なのではないか。こうした「都市＝つながりの失われた場所」というイメージは古くから世界中で議論されてきたものである。また、近年注目されている「無縁社会」の議論においても、想定されているのは都会の無縁であるなど、近年でも同様の議論は繰り返し行われている。古くから現代に至るまで、都市は人々を孤立させ、様々な悪影響をもたらす場所として描かれることが多かったのである。

そうした「都市＝つながりの失われた場所」というイメージは、20世紀初頭にアメリカのシカゴ学派都市社会学によって、都会においてコミュニティが喪失されているという「コミュニティ喪失論」として、学問的にも定式化されている。その後、都市が人々の紐帯にあたえる影響に関する問いはコミュニティ問題と名付けられ、都市においてつながりが失われているのか否かを争点として、都市社会学においても長らく議論が続けられてきた。

それに対して、近年では「都市＝つながりの失われた場所」というイメージは経験的なデータによってあまり検証されてこなかったことや、必ずしも自明ではないことが指摘されている。また、都市でも農村と同等のコミュニティが存続しているとする「コミュニティ存続論」や、都市ではコミュニティ喪失論の議論とは異なるメカニズムが働いているとする「コミュニティ変容論」の立場からの議論も行われるなど、コミュニティ喪失論に対しては批判的な議論もなされているのである。では、日本において、都市はつながりが失われた場所なのであろうか。それとも実態はそうしたイメージとは異なるのであろうか。

そのことを明らかにするために、本報告では社会調査データの分析によって日本におけるコミュニティ問題の検証を行う。そして社会調査データの分析から都市と農村の社会的ネットワークを比較することをおして、日本でつながりの問題が生じている場所はどこなのか、さらには日本の無縁問題で考えるべき点は何なのかということについて、問題提起する。

【プロフィール】

1983年岡山県生まれ。関西大学社会学部助教。専門は、都市社会学、計量社会学、社会的ネットワーク論、コミュニティの国際比較。横浜国立大学卒業、大阪大学大学院人間科学研究科博士課程修了。2013年以降、現職。博士（人間科学）。主要業績は、著書『現代日本における都市メカニズム』、論文「都市は人間関係をどのように変えるのか」『社会学評論』第62巻2号、「同類結合に対する都市効果の検討」『理論と方法』第26巻2号など。

20 万個あるため池が陸の津波を起こす可能性

環境都市工学部 教授 小林 晃

【概要】

ため池は高さ 15m 以下のアースフィルダムで、農業用水の水利施設である。その数は全国で約 21 万個存在しており、その多くは関西及び瀬戸内地方に分布している。ため池の多くは江戸時代以前に建造されており、その構築材料、方法も不明である場合が多く、堤体の強度もよくわかっていない。さらに洪水吐の容量も極めて小さいので、地震や豪雨により決壊する可能性が高い。

一般にため池は山間部あるいは山裾部に作られ、そこで水を貯めて、下流側の農地に用水路で配水される。河川堤防も決壊すると大きな被害を発生させるが、河川は谷を流れるのでその標高は低い場合が多い。一方、ため池は標高が平地よりも高いところにある場合が多く、決壊すると土石流を伴って下流地域に流れ込むことになる。また、ため池の管理は水利組合や農業者個人である場合が多く、農業従事者の減少と高齢化により十分な管理が難しい。

さらに、近年は農地から宅地への転用も進み、農業と関係のない住民が下流側地域で増加しており、上流にため池が存在することを知らない住民も多く、その危険性の認知度は低い。したがって、もしため池が豪雨や地震により決壊した場合には山側から土石流が押し寄せ、大きな被害を引き起こす可能性がある。

農林水産省では、過去の豪雨被害などのデータを用いて、危険度の高いため池を判別し、貯留量の大きい危険度の高いものから改修を行っている。しかし、ため池の場合、利用者の個人負担もあり、改修工事着手は年 200 件程度と遅々としている。このような現状において、関西瀬戸内地方が南海地震で被災する確率は年々高くなり、集中豪雨の降雨強度も増加しており、ため池による陸の津波の可能性は高くなりつつあると言える。被害を最小化するためには堤体自体の強化というハード対策だけではなくハザードマップや避難訓練、土石流流下防止施設など、間接的あるいはソフトな対策が重要であることを提起する。

【プロフィール】

1958 年大阪生まれ。関西大学環境都市工学部教授。現在の専門はプロジェクトマネジメント、バックグラウンドは地盤工学。京都大学農学部農業工学科卒業、間組、岩手大学農学部、京都大学大学院農学研究科を経て、2011 年 4 月以降現職。博士（工学）。ため池防災・減災総合対策検討委員会委員、ため池機能診断マニュアル及びため池管理規定検討有識者委員会委員、愛知県入鹿池耐震性委員会委員、農業用ダム全国総合調整評価委員会委員、東北農政局・沖縄総合事務局・九州農政局・近畿農政局管内国営造成農業用ダム安全性評価委員会委員、処分システム化学影響評価高度化開発評価委員会委員、大阪市環境影響評価専門委員会委員など多数の社会的活動に参加。